

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K03461

研究課題名(和文) 自閉スペクトラム症の女性が抱える内在化障害に対する支援方法の開発

研究課題名(英文) Project of Support Methods for Internalizing Disorder of Women with Autism Spectrum Disorder

研究代表者

木谷 秀勝 (Kiya, Hidekatsu)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：50225083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：支援方法の開発を目的に、ASD女性の自助グループを3年間で計13回開催した。参加者はASDの診断と診断告知を受けた15名(中学1年～20代後半)に増えた。その結果、参加者同士が共感的に視聴する姿勢や、お互いの余暇スキルを主体的に取り入れる様子が見られた。同時に、自助グループ参加者に自分らしさとカモフラージュとの狭間で生じる葛藤について半構造化面接を行った。「語り」の分析の結果、自分らしくいられる時空間に「気づきの時期」と「多様性」が、過剰なカモフラージュなど内在化障害の予防だけでなく、自由度の高い生き方を保証する要因であることが示唆された。そこから、この自助グループ活動の意義が再認識された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の3年間の研究は、主として青年期のASD女性を対象としているが、今回報告する研究成果を受けて、次の2点を学術的意義や社会的意義として考えている。第1に、今回の研究成果からは、ASDだけでなく、すべての神経発達症に対する予防的支援の方法にも援用できること。第2に、国内で十分な理解が進んでいない「カモフラージュ」の視点が、今後のASD男女ともに支援として重要であること、以上である。

研究成果の概要(英文)：With the aim of developing support methods, self-help group for women with ASD were held a total of 13 times over a three-year period. The number of participants increased to 15 (from 13 years old to late 20s) who were diagnosed with ASD and were notified of the diagnosis. As a result, it was observed that the participants empathized with each other and proactively adopted each other's refresh skills. At the same time, participants in self-help groups were interviewed semi-structured about the conflicts that arise between their identity and camouflaging. As a result of the analysis of "narratives", it was suggested that the "period of awareness" and "diversity" of time and space in which they can be themselves are not only factors that prevent internalizing disorders such as excessive camouflaging, but also guarantee a highly flexible way of life. From there, the significance of this self-help group activity was reaffirmed.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自閉スペクトラム症 青年期の女性ASD 内在化障害 カモフラージュ 予防的支援方法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始前後から女の子・女性(以下、女性)ASD(自閉スペクトラム症)が抱えるさまざまな問題点が指摘され始めていた。その背景には、男性ASDの行動特徴を基準とした診断などの問題とともに、女性ASDの場合、その症状を見えにくくする行動特徴が指摘され始めていた(砂川, 2015、Hull et al., 2017)。同時に、女性ASDが抱える問題は、内在化障害(抑うつ、不安、心身症等)の視点として、特に対人場面での社交不安や回避制限性食物摂取症などの摂食障害との関連性が指摘されるようになってきた(木谷, 2019)。

(2) こうした女性ASDが抱える多様な問題に対するアプローチとして、木谷・川上(2019)は、「からだ・こころ・関係性」を中心とした多面的なアプローチの重要性を指摘すると同時に、青年期の女性ASDの自助グループ活動の実践から、「自分らしく生きる」ための自己理解の重要性を指摘した(木谷・岩男, 2019)。

2. 研究の目的

そこで、本研究では次の2点を目的として研究を進めた。

(1)これまで実践してきた自助グループ活動(以下、「ガールの集い」)を通して、単に自己理解を深めるだけでなく、多様性と自由度のある「自分らしく生きる」ことが主体的に展開できるかどうかを検討する。

(2)「ガールの集い」の参加者を対象とした半構造化面接を行い、内在化障害の基盤にある「自分らしさ」と「カモフラージュ(周囲に合わせて、頑張ろうとする自分)」の狭間に生じる葛藤などの内在化障害が派生する要因と、予防的対応を可能とする支援方法を検討する。

3. 研究の方法

(1)「ガールの集い」は、原則として中学生以上で、専門医からASD(あるいは発達障害)の診断と診断告知を受けている女性を対象としている。従来の予定では、効果測定として心理検査などを計画したが、最初の2年間は新型コロナウイルス感染予防のために、活動は最小限に留めて、オンラインやハイブリッドなどの方法を活用して、通常の半日(2時間~4時間)の定期的な活動だけを行なった。参加者をサポートするスタッフは、総括責任者の木谷を除いて、全員が臨床心理士/公認心理師の資格を有する女性、あるいは木谷研究室の大学院生が担当して、安全かつ安心できる活動環境に配慮した。

(2)「ガールの集い」の参加者を対象とした半構造化面接は、新型コロナウイルス感染予防のため、調査期間の前半で実施することが困難であった。そこで、令和3年度は参加者を対象として、「コロナ禍の過ごし方」に関するアンケート調査を実施した。その後、参加者を対象とした「普通ってなんだろう?」をテーマとしたオンラインでの座談会を行ない、その会話分析を行った(川上・木谷, 2022)。さらに、令和4年度には、「自分らしさ」と「カモフラージュ」の狭間に生じる葛藤について、半構造化面接を行い、「語り」の分析を行った。

(3)この3年間で、女性ASDや発達障害に関する論文が国内外で報告されてきたことを受けて、研究分担者の岩男芙美が中心となり、文献考察を進めた。

4. 研究成果

令和2・3年度は、新型コロナウイルス感染の影響を大きく受けたため、予定していた調査や活動を最小限にせざるを得ない状況となったが、以下の示す研究成果は達成できた。

(1)「ガールの集い」は、この3年間で12回実施した。その大半がオンライン形式で行った。当初はオンライン参加や機能に戸惑う姿が見られたが、すぐにそれぞれの参加者が「自分らしく」参加することができるようになった。対面と違って、オンラインの場合には、もっともくつろぐことができる自室から参加できること、マスクをしなくても会話ができること、画面共有すれば、写真や動画を全員が共有できること、疲れた場合には、チャットで連絡をして、画面オフでも参加できるなど、さらに、こうした参加方法でも大丈夫であることを他の参加者がすぐに取り入れることも可能であった(木谷他, 2021、岩男他, 2022)。

(2)令和4年度に実施できた1泊2日の合宿形式のプログラムでは、福岡市から車で約1時間の高原地帯にある宿泊施設を借り切る形で、新型コロナウイルス感染予防対策には十分に配慮しながら、プログラムを進めることができた。その成果としては、次の2点が検討された。

日常生活から離れたデフォルト・モードな時空間の確保

ASDでは、デフォルト・モード・ネットワーク(以下、DMN)の機能不全が指摘されている(Jung et al., 2014)が、今回の合宿ではDMNな時空間を取り戻すことが可能であった。具体的には、第1に、宿泊施設的环境自体(周囲が森林)が視覚・聴覚からの刺激を最小限にする環境のため、安定した睡眠が保証されること、第2に、プログラム全体を「緩やかに」組んでいることもあり、参加者個々のペースで活動に参加するか休息を取るかを「予測する」時空間が保証されること、第3に、適度に「ぼんやりする」休憩を取ることで、不安に襲われることなく、自分らしさを表現できる時空間が保証される。その結果として、次に述べる主体性を回復させることが可能になった。

主体的に「関係性」作りが展開できる時空間の確保

合宿では、「からだ」のリラクゼーション活動(田中他, 2023)を取り入れていたが、参加者自身が日常生活で実践しているストレッチやエクササイズを主体的に他の参加者やスタッフに教えてくれる場面が何回も見られた。また、参加者がスマホを活用したゲームにみんなを誘う様子も見られた。このように、「からだ」と「こころ」の元気を回復(DMNの機能)できる時空間を保証することが、新たな主体性ある「自由な関係性」にもつながることが明らかになった(木谷他, 2023)。

(3)「コロナ禍の過ごし方」に関するアンケート調査では、「困ったこと」、「安心したこと」、「心身の健康の維持のため、続けていたこと」の3点を調査した。このアンケートには参加者7名が回答した。その結果、「困ったこと」では外出や外食などの気分転換の機会が減少したことやアルバイトができないなどの経済的な面が大きいことが報告された。「安心したこと」では安心して自宅や自室に閉じこもることができることやマスクをしても周囲が気にしないことが報告された。「健康管理」では無理のない範囲内でヨガやストレッチを続けること、「自分のペース」を維持していたことが報告された。以上の調査結果からは、コロナ禍にあって主体的に工夫しながら過ごしていたことが明確になったが、その背景には、家族の障害に対する理解とともに、「ガールの集い」の情報交換など、定期的な活動成果が間接的に円強していたことは確かである。

(4)「普通ってなんだろう?」をテーマとしたオンラインでの座談会には8名が参加した。主なテーマは「普通について」、「自分らしく生きることについて」を中心にして、8名全員がほぼ同じように意見が出せるように配慮した。分析方法は、KH Coder3を活用した会話分析(ナラティブ)を行なった(岩男他, 2022)。

「普通」では、成長の早い段階(小中学生)から、自分が「普通」とは異なることに気づき、自分らしく生きるか、カモフラージュするか葛藤が見られていた。こうした行動パターンが長期間にわたる結果、心身の疲労につながるだけでなく、その行動パターンが「当たり前過ぎる」ために、本人や周囲も心身の疲れに気づきにくくなることが示唆された。

「自分らしさ」では、年長者では、長期間にわたる「普通」に合わせた生活によって心身ともに疲労していることもあり、「自分らしさ」を大切にすることが必要であることを強調していた。こうした結果からも、環境が変化するたびに、新たなスキルを身につけることによりかなり大きなエネルギーを注ぐ必要性があり、そのためにQOL(生活の質)が低下するリスクが高いことが示唆された。

カモフラージュの功罪のうち、「功」の側面として、今回の協力者は適度に「自分らしさ」を維持しながら状況に応じてカモフラージュしていることがわかった。その背景として、診断や診断告知をきちんと受容できていること、学校という束縛された世界を卒業して、自分の価値観で過ごせる時空間と人間関係を自己決定できることが考えられる。「罪」の側面として、過剰にカモフラージュ方略を続けること、「自分の価値観を貫く」方略に固執することの2つが大きなリスクとなり、そこに感覚過敏を併存する場合に、社交不安や抑うつ感が高いなり、内在化障害に至ることが示唆された。

(5)「自分らしさ」と「カモフラージュ」の狭間に生じる葛藤に関する調査研究では、参加者8名(20~29歳)が協力してくれた。半構造化面接では、自分らしくいられる時空間はあるか、どのような環境か、自分らしくいられる時空間にいるときの心身の状態、反対に、自分らしさを抑える時空間にいるときの心身の状態、について質問した。分析方法は、それぞれの「語り」を逐語録にし、KJ法で分析した(岩男他, 2023)。その結果、「自分らしさ」を維持するためには次の2つのカテゴリーが重要になる。第1に、「自分らしくいられる時空間への気づきの時期」である。学校において周囲との違和感が生じ始める時期として思春期が多いこともあり、それ以前に本人や家族が気づくかどうかは、青年期以降のメンタルヘルスに大きな影響を与える。第2に、「自分らしくいられる時空間の多様性」である。日常的に複数の時空間(信頼できるパートナーや当事者グループなど)で異なるアバター(分身)を使い分ける多様性が保証されることで、心身の疲れを最小限にすることが可能になる(川上・木谷, 2022)。その一方で、「自分らしさ」

を阻害するカテゴリーとして、「自分らしさを抑える時空間における体験」がある。これに該当する時空間として、対人場面一般・学校・職場・医療福祉サービスなどでは、周囲が予想する以上にカモフラージュや警戒感が強く影響していることが示唆された。

(6)文献考察では、近年注目されている ASD 女性の「カモフラージュ」に関して、海外の論文 16 本を対象として文献検討を行なった(岩男他, 2022)。その結果、カモフラージュが影響するメンタルヘルスの問題が喫緊の課題であることや、今後の well-being (自分らしさ) で心身共に健康な多様性のある生き方の実現のためには、カモフラージュの肯定的側面をさらに検討する必要性がある。また、ASD 女性への支援の方向性として、感覚障害の視点を踏まえながら認知 - 身体感覚へのアプローチが重要であることも示唆された(田中他, 2023)。

(7)今後検討すべき支援方法の基盤として、次の 3 点が重要になる。第 1 に、もっとも有効な予防的支援は、ASD 女性が抱えるさまざまな問題が発達早期(特に幼児期)から起こっていることを周囲が認識することである。第 2 に、この認識に立脚しながら、もっとも対人関係で敏感となりやすく、内在化障害が発症しやすい思春期前後から、余暇支援を含めた複数の「自分らしさ」を表現できる時空間を保証し、多様性と自由度の高い生き方を安全かつ安心して日常生活に取り入れることである(木谷, 2021)。そして、第 3 に、青年期以降も、それぞれの年代に応じた相互に共感でき、人生のモデルとなるパートナーとの関係性を維持することが重要になる。

<引用文献>

Hull, L., Petrides, KV, Allison, C., Smith, P., Baron- Cohen, S., Lai, M., Mandy, W., "Putting on My Best Normal": Social Camouflaging in Adults with Autism Spectrum Conditions. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 47(8), 2017, 2519-2534

岩男英美、木谷秀勝、豊丹生啓子、土橋悠加、牛見明日香、飯田潤子、藤井寛子、森久美子、青年期自閉スペクトラム症の女性にとっての社会的カモフラージュの功罪 - 『ガールの集い』参加者の座談会を通して、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、53号、2022、93-102

岩男英美、田中亜矢巳、櫻井凜、木谷秀勝、自閉スペクトラム症の女性における「カモフラージュ」の特性 - 文献考察を通して、中村学園大学発達支援センター研究紀要、14号、2022、6-15

岩男英美、土橋悠加、藤井寛子、飯田潤子、豊丹生啓子、田中亜矢巳、木谷秀勝、青年期の女性 ASD が自分らしく振舞う時空間と自分らしさを抑える時空間における体験、第 64 回日本児童青年精神医学会総会ポスター発表(予定) 2023、弘前市

Jung M., Kosaka H., Saito DN., Ishitobi M., Morita T., Inohara K., Asano M., Arai S., Munesue T., Tomoda A., Wada Y., Sadato N., Okazawa H., Iidaka T., Default mode network in young male adults with autism spectrum disorder: relationship with autism spectrum traits. *Molecular Autism*, 5(1), 2014, 35-45

川上ちひろ、木谷秀勝編著、発達障害のある女の子・女性の支援 - 「自分らしく生きる」ための「からだ・こころ・関係性」のサポート、2019、金子書房

川上ちひろ、木谷秀勝編著、発達障害のある女の子・女性の支援 - 自分らしさとカモフラージュの狭間を生きる、2022、金子書房

木谷秀勝、岩男英美、土橋悠加、豊丹生啓子、飯田潤子、ウェクスラー式知能検査に見られる内在化障害 - 社交不安・心身症・女性の発達障害・選択性緘黙を中心に、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、48、2019、169-178

木谷秀勝、岩男英美、楽しむことをベースとした「アスペガールの集い」. 川上ちひろ、木谷秀勝編著(2019): 発達障害のある女の子・女性の支援 - 「自分らしく生きる」ための「からだ・こころ・関係性」のサポート、2019、156-163、金子書房

- 木谷秀勝、岩男芙美、豊丹生啓子、土橋悠加、牛見明日香、飯田潤子、青年期の女性 ASD への「自己理解」プログラムにおける変化-「カモフラージュ」から解放される居場所、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、50、2020、171-180.
- 木谷秀勝、余暇活動が育む「こころ」と「からだ」のバランス感覚．加藤浩平(編著)、発達障害のある子の余暇支援、2021、金子書房
- 木谷秀勝、岩男芙美、豊丹生啓子、土橋悠加、牛見明日香、飯田潤子、藤井寛子、森久美子、青年期自閉スペクトラム症の女性に見られたコロナ禍の苦悩とレジリエンス『ガールの集い』の活動を通して、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、52号、2021、81-90
- 木谷秀勝、岩男芙美、田中亜矢巳、土橋悠加、飯田潤子、豊丹生啓子、原田奈保、松岡明日香、藤井寛子、櫻井凜、青年期 ASD 女性の自助グループ活動に関する実践報告 - 合宿方式での活動を通して、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、55号、2023、51-56
- 砂川芽吹、自閉症スペクトラム障害の女性は診断に至るまでにどのように生きてきたのか：障害を見えにくくする要因と適応過程に焦点を当てて、発達心理学研究、26(2)、2015、87-97
- 田中亜矢巳、木谷秀勝、岩男芙美、松岡勝彦、青年期自閉スペクトラム症（ASD）当事者におけるバイタルサイン計測の試みと展望、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、55号、2023、43-49

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木谷 秀勝, 岩男 英美, 豊丹生 啓子, 土橋 悠加, 牛見 明日香, 飯田 潤子, 藤井 寛子, 森 久美子	4. 巻 52
2. 論文標題 青年期自閉スペクトラム症の女性に見られたコロナ禍の苦悩とレジリエンスー『ガールの集い』の活動を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 81-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岩男 英美, 木谷 秀勝, 豊丹生 啓子, 土橋 悠加, 牛見 明日香, 飯田 潤子, 藤井 寛子, 森 久美子	4. 巻 53
2. 論文標題 青年期自閉スペクトラム症の女性にとっての社会的カモフラージュの功罪ー『ガールの集い』参加者の座談会を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 93-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木谷 秀勝, 船越 高樹, 藤井 寛子, 牛見 明日香, 山口 真理子, 坂本 佳代子	4. 巻 50
2. 論文標題 青年期ASDの「自己理解」合宿の実践報告 - 「自己理解」から「自己決定」への移行を目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 161-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木谷 秀勝, 岩男 英美, 豊丹生 啓子, 土橋 悠加, 牛見 明日香, 飯田 潤子	4. 巻 50
2. 論文標題 青年期の女性ASDへの「自己理解」プログラムにおける変化-「カモフラージュ」から解放される居場所	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木谷 秀勝, 船越 高樹, 藤井 寛子, 山口 真理子, 坂本 佳代子, 牛見 明日香, 土橋 悠加, 藤本 美紗希, 藤村 美穂, 渡邊 登萌	4. 巻 51
2. 論文標題 青年期ASDの「自己理解」合宿の実践報告 - 自分らしい社会参加を目指して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩男英美、田中亜矢巳、櫻井凜、木谷秀勝	4. 巻 14
2. 論文標題 自閉スペクトラム症の女性における「カモフラージュ」の特性 - 文献考察を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中村学園大学発達支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木谷秀勝、岩男英美、田中亜矢巳、土橋悠加、飯田潤子、豊丹生啓子、原田奈保、松岡明日香、藤井寛子、櫻井凜	4. 巻 55
2. 論文標題 青年期ASD女性の自助グループ活動に関する実践報告 - 合宿方式での活動を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 51-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中亜矢巳、木谷秀勝、岩男英美、松岡勝彦	4. 巻 55
2. 論文標題 青年期自閉スペクトラム症 (ASD) 当事者におけるバイタルサイン計測の試みと展望	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 43-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木谷秀勝
2. 発表標題 女の子・女性の発達障害の理解と支援
3. 学会等名 日本健康相談活動学会第18回学術集会（Web開催）（教育講演）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木谷秀勝
2. 発表標題 発達障害のある女の子・女性の理解と支援-ASDに見られるカモフラージュと内在化障害を中心に
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会教育講演（Web開催）（教育セミナー）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤井 寛子, 木谷 秀勝, 船越 高樹, 山口 真理子, 坂本 佳代子, 牛見 明日香, 土橋 悠加, 中並 朋晶
2. 発表標題 青年期自閉スペクトラム症への短期集中型「自己理解」プログラムの試み（第4報）
3. 学会等名 第61回日本児童青年精神医学会総会（神戸市）WEB開催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩男英美、土橋悠加、藤井寛子、飯田潤子、豊丹生啓子、田中垂矢巳、木谷秀勝
2. 発表標題 青年期の女性ASDが自分らしく振舞う時空間と自分らしさを抑える時空間における体験
3. 学会等名 第64回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 木谷秀勝
2. 発表標題 女性の発達障害と支援：生涯発達の視点から
3. 学会等名 【日本臨床発達士会第19回全国大会】大会準備委員会企画シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 加藤浩平、柘植雅義	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 112
3. 書名 発達障害のある子ども・若者の余暇活動支援	

1. 著者名 東條 吉邦, 高森 明, 上野 真哉, 藤堂 栄子, 柴田 章弘, 尾崎 ミオ, 井上 メグ, 木谷 秀勝, 柏木 理江, 日戸 由刈, 奥住 秀之, 三森 睦子, 照山 絢子, 竹中 均, 藤野 博	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 160
3. 書名 発達障害者の当事者活動・自助グループの「いま」と「これから」	

1. 著者名 倉光修、渡辺慶一郎、川瀬英理、横山太範、網島三恵、田中康雄、岩崎沙耶佳、木谷秀勝、綿貫愛子、加藤浩平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 168
3. 書名 自閉スペクトラム症のある青年・成人への精神療法的アプローチ	

1. 著者名 川上ちひろ、木谷秀勝	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 210
3. 書名 続・発達障害のある女の子・女性の支援	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	岩男 芙美 (Iwao Fumi) (00781030)	中村学園大学・教育学部・助教 (37109)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------